

2026年6月28日（日）第559回・三島市の自然環境と観光資源の現状と未来

第559回 グラウンドワーク三島アクショントーク

三島市の自然環境と観光資源の現状と未来

ホテルの危機から、富士山を仰ぐ「歩く観光ハブ」への再定義

△ ホテル生息数の激減と複合要因

主因：危機的な水位低下
富士山の降雨量は十分だが、桜川・御殿川の流量が極端に減少。湿気不足が産卵行動を阻害している。

カモによるバイカモ・幼虫の食害 近隣工事による地下水脈への影響懸念

観測16年間で 最悪水準

60匹 228匹
今年度最多 過去最高

△ 富士山がもたらす精神的価値

"登頂により、日常の悩みが2割ほど落ちるような精神的浄化が得られる。"

懺悔と感謝 「登れる体」への感謝を再認識する場
継承される霊性 864年貞観大噴火以来の浅間神社の歴史

「歩く観光」の世界的ハブへ

三島を起点に富士・箱根・伊豆を繋ぐ広域ネットワークの構築

国際連携 台湾千里歩道協会と4月・8月に協定締結予定 低コスト整備 信号・水場・弁当補給のインフラ重点整備

源平川 箱根旧街道 中里の大溝

市民が主役の景観維持モデル

英国に学ぶ「愛郷心」 歩く人が「景観の監視役」に
「何も無い丘陵」を誇りとして守る文化。歩く人がゴミを拾い、地域の価値を高める。 継続的な美化が再訪意欲を醸成

最優先アクション

- 4月/8月：台湾側との協定締結
- 河川流量低下の専門家調査
- バイカモエリアの防鳥暫定策

ラジオ番組「グラウンドワーク三島・アクショントーク」第559回の内容を体系的に要約する。

前半は、三島市内を流れる源兵衛川でのホテルの出現数が16年間で最悪水準に落ち込んだ現状とその生態学的・環境的要因の分析についてです。

後半は、富士山の世界文化遺産登録の回顧と富士山登山がもたらす精神的価値、さらに三島を「歩く観光」の拠点・ハブとする具体的な構想、市民主体の景観維持の重要性についての議論で構成される。

三島市におけるホテル生息数の激減とその原因分析

番組冒頭、長年ホテルの観察を続けるグラウンドワーク三島のジャンボさんが現状報告として、今年の飛翔数の状況を、この16年間で最悪と位置づけた。

観察は、毎年5月1日に開始し、16年間継続している。過去のピークでは累計約3,900匹が確認され、1日の最多は228匹だったが、今年は1日の最多が60匹、直近の飛翔は5～6匹にとどまる。昨年延べ出現数は1,000匹強だったが、今年はそこに届くか、不透明だと危機感を示した。

要因分析では、第一に源兵衛川の水位低下が最も重大な影響とされる。例年6月後半にかけて、水位・水量が急上昇するところ、今年は低位のままに推移している。

富士山の降雨量や積雪量の調査では、地下水が豊富な年と大差ないとされる一方、桜川にはほとんど水が流れておらず、御殿川は水流が途絶する状況が確認され、発言者は異常性を強く懸念する。

3年前から始まった三島駅南口東街区再開発事業に関わる工事以降、水位・水量の減少傾向が強まっているとの印象も述べられた（確証は未提示）。

水位低下は湿気の不足を招き、ホタルの上陸・飛翔・産卵行動に不利に作用する。通常、水面が上がれば、水辺の土が湿り、土中にあるホタルにとって産卵が安全だと「認知」しやすいが、今年は湿気が乏しく、行動が鈍る可能性が示唆された。

さらに鳥類専門家の指摘として、バイカモの花がカモに食べられ、源兵衛川で植栽された花が食害を受けていること、加えてカモが長い嘴でバイカモ群落内を探り、ホタルの幼虫を捕食している事例が報告された。こうした複合的な要因が、出現数の低迷に拍車をかけていると捉えられている。

ホタルが飛ばなくなることによる「街のイメージ」低下を「重大リスク」と位置づけ、これまでの水辺清掃や環境美化の努力が数値向上につながらない現状に痛みと悔しさを表明した。

生き物たちとの共生を前提としつつも、過度な介入で生態的なバランスを崩すことは避けるべきだとし、同時にカモの食害に対して「節度ある生き方」を促す対話の必要性をユーモラス（「カモネギ会議」）に提起した。

イベント化している市内での「ホタル祭り」等での寄付金を集めることを提案し、市民団体・環境団体への活動支援の必要性を訴えた。

富士山の魅力と登山がもたらす体験価値

富士山の世界文化遺産登録（2013年6月22日、カンボジア・プノンペン、現地時間4時33分23秒）をジャンボさんが、現地で見届けた回想から、富士山の文化的・精神的価値が語られた。

富士山は「霊峰」としての敬意を集め、登山は肉体的に厳しい一方で、目的を持つことで深い意味が生まれるという視点が示された。

旅行のプロであるゲストの室伏強さんは、毎年登山し、「登れる体への感謝」と「親のためのお守り購入」を目的に掲げることで、登頂の価値とありがたみが高まると述べた。

登山体験の具体例として、81歳で26回登頂した高齢登山者との邂逅や、自身の6回の登頂歴、昨年には、昭和2年生まれの99歳（当時）の佐川トキ氏（NHKドキュメンタリーで紹介された人物）との遭遇が紹介された。

登頂後には大きな達成感、天候に恵まれた際の唯一無二の眺望、「お鉢巡り」や「剣ヶ峰」到達の充足感が語られ、精神的浄化（懺悔）にも通じる体験として、悩みが「2割ほど落ちる」ような軽減効果を感じるという見解が示された。

富士山のスピリチュアルな側面として、頂上で「気」を得るパワースポット性に触れられ、河口湖そばの富士浅間神社（本来の読みは「あさま」）の歴史（864年の貞観大噴火に伴う富士五湖形成、垂仁天皇が最大のパワースポットに社を建て「浅間神社」と称した由来）と強い霊性（参拝時に胸が高鳴る体感）が強調された。

登山後の疲労と爽快感の相乗効果が「人間の成長」を促すという言葉も添えられ、年齢に関わらず、無理せず、山小屋に泊まりながらゆっくり登れば、世界観が変わる体験が得られると、登山推奨と励ましの言葉が送られた。

ウォーキング観光拠点としての三島市の可能性

三島市は「伊豆の玄関口」であり、新幹線アクセスを持つ地理的優位とともに、富士山・箱根・伊豆に歩いて、広域に接続できる「拠点・ハブ」の潜在力が語られた。

台湾千里歩道協会の女性リーダー・周氏が、三島の源兵衛川～松毛川千年の森～境川・清住緑地～柿田川を歩き、優れたツアーコース化の可能性を評価した。

箱根旧街道の接続も視野に、富士山を含む「広域的ウォーキングルート」として、台湾との連携を進める構想が示された。

具体的には、台湾側と8月での協定締結を予定し、同協会の多数会員と連携して、三島を拠点・ハブに、東西南北に自在に歩ける周遊・回廊動線を形成する方針である。

三島市内では、源兵衛川—松毛川—中郷地域の田んぼを貫く大溝川沿いの歩道など、借景としての富士山全景を、歩きながら堪能できる贅沢なルートが複数存在すると説明。

歩行者用へのルート案内板の整備、手洗い場（水道）とトイレ整備などが整えば、比較的低コストでの充足した歩行環境を整備可能だとされた。

箱根方面では、山中城まで富士山のビュースポットが連続し、三島市側からの登山は眺望に優れているという実地体験も共有された。歩くことでしか見えない景色・価値があり、インバウンドを含む新たな観光需要の創出が期待される。

市民参加による景観維持と地域愛の醸成

ジャンボさんは、経験豊富なイギリスのウォーキング文化に触れ、手入れの行き届いた「何もない平坦な丘陵」の景観保全を住民が誇りとして、担っている点が紹介された。

歩く人々がゴミ袋を持ち、美しい状態を「地域プライド」の証として守る。その姿勢は、来訪者の満足と消費（ビールやワイン、軽食）にもつながる好循環を生む。

三島も同様に、ゴミが少なく、市街地から豊かな自然空間に、すぐに移行できる強みがある。ウォーキング人口の増加に伴い、歩く人々が「監視役」になって、景観維持に寄与するという視点が共有された。

また、リピーターの訪問者が現場を歩いて良し、悪しを具体的に指摘し、草刈りや清掃を行うことが、評価に直結する事例が語られた。

継続的な美化は友人を連れて再訪したいという動機を高め、ひいては世界中から人を呼ぶ力になるという提言である。

水は、三島の「宝物」であり、その水を供給する富士山への感謝と敬意の心が、ゴミを捨てない行動へとつながる。

日常的に富士山を見られる贅沢が、地域への愛着（愛郷心）を育て、歩く文化と環境美化の共鳴を生むという結びが示された。